

令和八年 第二回例会

観世流

# 緑泉会

令和八年

六月二十一日(日)

午後一時開演(正午開場)

## 矢来能楽堂



「杜若」シテ 中所 宜夫 (撮影 駒井杜介)

素謡 Suutai .....	鶉	飼塚若	Ukai .....	津村 禮次郎
狂言 Kyougen ...	狐		Kitsunozuka ...	三宅 右矩
能 Noh .....	杜		Kakitsubata .....	新井 麻衣子

令和八年 第二回例会 番組

素謡 鶉

飼

間廣大王

尉 津村 禮次郎

僧 中森 貫太

地謡

佐久間 二郎

奥川 恒治

桑田 貴志

狂言 狐

塚

太郎冠者 三宅 右矩

主 高澤 祐介

次郎冠者 三宅 近成

後見 前田 晃一

【休憩 二十分】

仕舞 通盛 永島 充

班女 車 鈴木 啓吾

舞アト 墨 敬子

地謡 奥川 恒成

中所 宜夫

筒井 陽子

能 杜

若

杜若ヲ精 新井 麻衣子

旅僧 則久 英志

大鼓 佃 良太郎 太鼓 姥浦 理紗

小鼓 大村 華由 笛 藤田 貴寛

後見 石井 寛人

奥川 恒治

地謡 奥川 恒成 佐久間 二郎

筒井 陽子 鈴木 啓吾

中森 健之介 中所 宜夫

坂真 太郎 永島 充

【終了予定 午後三時三十分】

許可のない録音、撮影は一切禁止です。携帯電話は電源からお切り下さい。演能や他のお客様の迷惑となる行為はご遠慮願います。場内によっては返場頂く事もございますのでご了承下さい。

仕舞

狂言

素謡

鵜飼 (うかい)

安房の清澄の僧(ワキ)が供の僧(ワキツレ)を従えて、甲斐の国行脚にやって来る。六浦から鎌倉、都留を経て石和に至る。シテは鵜飼を生業とする老漁師だが、後世を思えばやめたほうが良い殺生を、鵜飼いの面白さにやめられないと嘆き、命のための業を疎ましく思いつつ、いつものように御堂にある。

折しもそこに泊まっていた僧と行き合い、言葉交すうちに、従僧がかつて出会った鵜飼いが亡くなった有様を語る事となる。殺生禁断の場所を漁をしたため磔にされて沈められた有様を生々しく語り、自分はその鵜飼いの亡者だと明かす。僧の前で鵜飼いの面白さを再現して見せるが、月が出て篝火が効かなくなると、生前そうであったように、とほとほと暗闇の中へ帰って行く。

僧が法華経を河原の石に書きつけて吊っている、閻魔大王が現れる。その力により、例の漁師は殺生の罪で地獄に落ちるはずだったのを、僧に宿を貸した功德で、成仏にいたる船に乗せて西方に送られる。最後は法華経の功德を讃えて終る。

狐塚 (きつねづか)

狐が出るという場所へ、収穫間際の田んぼの見張りに遣わされた太郎冠者だったが、見舞いにやってきた次郎冠者を狐が化けているものと思つて縛り上げてしまう。その後、やってきた主(頼うだ人)をも、供の狐だと決めつけて縛り上げて、さてさて顛末や如何に。

通盛 (みちもり)

鳴門の海に小宰相局と共に沈んだ平通盛の亡霊が、僧の供養に姿を現し、二の谷の合戦で木村重章に討たれた有様を見せる。最後、僧の弔いにより修羅道より成仏を遂げる。

土車 (つちぐるま)

父深草の少将に捨てられた二子を土車に乗せた傳は、狂い芸を見せつつ善光寺に至り、能力との狂え狂わぬの間答に腹をたてて、狂い舞を舞う。大君の国のためたさ、善光寺の尊さを讃え、阿弥陀仏に父との再会を祈願して、鼓を打ち、箏や笙を吹き鳴らして声を上げるが、何の反応もなく狂い止む。

仕舞

班女 (はんじょ)

美濃国野上の宿の遊女花子は、言い交わした男の形見の扇を手、宿を追われ、狂女となつて都下鳴に至る。中国の班捷女に擬えて「班女の扇は持っていないのか」と問われて、想いの中に沈んで行く。「舞アト」の仕舞はクセに続き中之舞を舞ったあとの部分である。「扇を見るにつけて、男の約束の言葉が思い出される。秋風は吹くのに萩の葉は答えることもない。鹿の声、虫の音までも契りと同様枯れ果てた。人心も変わり果て、「扇(あふぎ)」とは名ばかりで、逢えないばかりに恋しさはますます募る…」と語り舞う。

杜若 (かきつばた)

諸国一見の僧(ワキ)が都から東国行脚の旅を志し、三河国に至る。傍らの沢辺に盛りと咲く杜若に眺め入って居ると、何処からともなく女(シテ)が現れて声をかける。里の女と見えて、鄙には稀な気品があり、此処が八橋という杜若で有名な所だと、伊勢物語の二節を語る。「かきつばた」の五音を句の頭に置いて、都に残した妻を詠んだ在原業平の歌「唐衣きつなれにしましあればはるばるきぬる旅をしぞおもふ」について語つたのち、「業平は昔の人となつてしまつたけれども、歌に詠まれた杜若は今此処に咲いていて、あなたと私が出会つた事は、川が蜘蛛手のように流れる八橋に絡め取られた深い縁なのかも知れませんか」と話す。親しくなつた僧は、勧められるままに女の家に泊まる。

能

歌に詠まれた高子の後の唐衣を纏い、業平が豊明節会での五節舞で用いた初冠を被っている。僧の不審に杜若の精と名のり、歌舞の菩薩の化身である業平の歌の力で成仏の縁を得たと語る。「都に残された恨みもあります。けれどこの唐衣の袖を翻して、業平を都に返す願いを届けましょう。」と女は舞台を二廻りする。場は整えられて、業平の物語を杜若の精は曲舞のうちに物語る。

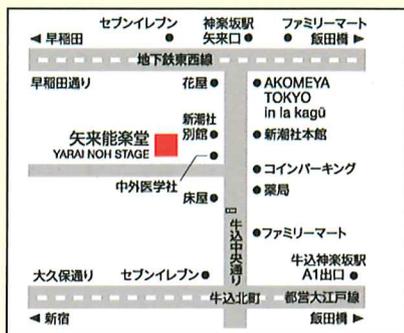
「初冠の晴れがましい出来事から、二転都を離れ、伊勢や尾張の海で波の帰ることを羨み、信濃では浅間山の煙に驚き、この三河では杜若に仮託して都の妻に思いを馳せ、人待つ女、物病みの女、玉簾の女など様々な縁がありました。業平は衆生済度のため、の仮の姿だったのです。」と長大な曲舞を舞い、さらに花に舞う蝶が雪の如くあるように、柳に飛び交う鶯の羽が金色に輝くように舞は続き(序之舞)、やがてその姿は、さらに遠い昔の思い出を呼びさまし、濃紫の花に卵の花の白が雪のように溶けて、薄紫の明け方の空の色となるかと思えて、夜は白々と明け、花の精は成仏の様子を見せて消えてゆく。

2026. 6.21 (日) PM1:00 (正午開場) 矢来能楽堂

〒162-0805 新宿区矢来町 60 ☎ 03-3268-7311

地下鉄東西線神楽坂駅下車 矢来口より徒歩 2 分 都営大江戸線牛込神楽坂駅 A1 出口より徒歩 5 分

駐車場はございません。 近隣のコイン駐車場をご利用下さい。



入場料 (全自由席)

会員券 (年 4 回) 一般 20,000 円 学生 10,000 円 1 回券 (当日券) 一般 6,000 円 学生 3,000 円

申込先: 各出演能楽師または緑泉会まで

津村 禮次郎 TEL 042-386-2131 FAX 042-386-2132 新井 麻衣子 TEL&FAX 04-2946-8389

令和 8 年 第 3 回例会 9 月 27 日 (日)

能……… 實盛 Sanemori …………… 鈴木 啓吾 能……… 鐵輪 Kanawa …………… 中野 宜夫